

り蜜を衣にかくるをてんふらと云、蠻語なるべし、小麥の粉をねりて、魚物などにつけて油あげにするをも云は、其形同じければなり、

〔毛吹草〕山城 南蠻菓子

〔薩藩舊記〕後集二十八 惟新公加治木御日記慶長十三年正月十二日庚子、半天連年頭御禮トシテ被參候、略中

一御樽壹丁并南蠻菓子一折進上、通詞シモン、

〔太閤記〕凡例

或問、ばてれんは日本之宗旨に對しては、何程あしき事に候や、答曰、宗旨に對しあしき事はさて置ぬ、日本之大敵にて候也、略中 所の吏務へ捧物を夥しくかよはせ、略中 若一町之所へ見物などに、件の人來りたりしかば、略中 下戸には、かすていら、ぼうる、かるめ、ひらあるへい糖、こんへい糖などをもてなし、我宗門に引入る事尤もふか、りし也、

〔江戸町中喰物重寶記〕

並かすていら、一斤ニ付代四匁八分 上同 五匁八分

上々同 六匁八分 大極上五三かすていら 十匁

丸ほうる、略中 五匁八分 豆金米糖 五匁六分

花ぼうる、略中 三匁 胡麻ぼうる、略下 二匁八分

〔和漢三才圖會〕百五加須底加須底須羅羅國以西巴爾亞保留止賀留加須底羅同

按加須底羅造法淨麪 一升 白沙糖 二升 用鷄卵八箇肉汁、搜和以銅鍋、炭火熬令黃色、用竹針爲窠孔、

使火氣透於中、取出切用、最爲上品、

〔槐記〕享保十年十二月五日晝、深誦殿御茶ニ召サル、略中

菓子シカステラノニシカエシ、